# 教育の楽しさと、おかしさなど…

## 退職を迎えて考えたこと

河合靖久

### はじめに

教育の仕事は、きわめて人間的な営みです。子どもたちに未来を託す仕事とも言えるのです。

「過去」と「未来」を「現在」でつなぐ「鎖の輪」に例えた教育辞典が気にいっています。

しかし、「教育改革」や目先の「新しい試み」などが叫ばれて数字や成績・業績などの名で教育現場は翻弄され、学校教育の破壊が進行しています。

### 一、慕われ頼られる喜び

教育関係者にとって、教育の素晴らしさは、なんと言っても、「子どもたちに慕われ頼られる」ことではないでしょうか。子どもたちとの間に信頼の絆があるからこそ、苦労や困難に耐えて仕事を続け、理想を求めて子どもたちと活動できるのだと思います。

一人ひとりの「人格の完成」をめざすこの活動は、人間が行うための誤解や間違いもありますが、それも立派な教育の材料なのです。「間違いを大切に」「教室はまちがう所だ」の言葉も、戦後の実践の中で確立されてきた考え方です。

最近は、授業に集中しにくい子どもたちが増えていますが、次のような体験があります。

苦労の割に、しっくりいかなかったクラスで、二学期になってから、やっと、「あっ、この子たちは、個性的な存在なんだ……！」と、思ったときから、なんとなく気持ちが通い合うようになりました。

親や教師が子どもらと力を合わせ、成長の喜びを共有する信頼関係を創り上げることは、学校教育の土台造りだと思います。子どもの成長のための仕事は、保護者との共同の作業です。

しかし、いったんこの信頼関係が失われると、悲惨な結果となります。子どもを真ん中に、共通の願いや

要求で取り組むことで教育実践は成り立つのです。

子どもたちに慕われ、親に頼られる信頼関係こそが、教育の土台であり、最高の喜びなのです。

## 二、教材開発と実践の喜び

私たちの仕事は、ある種の緊張感を持った毎日の生活の全てが、教育の材料だと言えることです。

私たちには、伝えたいことがあり、身につけさせたい力があります。教科書や指導書の有無に関わらず、子どもたちの「必要に合わせて」行うのが教育と考えます。

自然を通しての考え方・感じ方は、どの学生でも共通です。授業のきっかけとして毎日の授業の始まりに室温（気温、冬は室外も時々は…）を日付や天候、ニュースや発見などと合わせてメモしました。

春から、秋まで続けると、同じ温度でも感じ方が違うことを知ることができます。

湿度や日照時間・太陽高度などと関連させると太陽系の動きなどの理解につながります。太陽の動き（三年）は、グランドの棒のかげでもやりますが、一〇メートルの高さの校舎の影も動きが早く、おもしろいです。全国的に「校舎の窓は南向き、黒板は西向き」の意味を取り上げ、姿勢や鉛筆の持ち方、机や椅子の高さの指導もしました。教室のカーテンは、冬の低い日光がまぶしいために使うことを、教師になってから知りました。秋になると床に印をつけて、日光が廊下までとび出す冬至までの観察をします。地球の傾きと季節の変化の関係が学べるのです。

自然観察では、朝夕の犬の散歩が役に立ちました。鳥や草花、魚や小動物など季節や気候など、新鮮な教材を仕入れる貴重な時間です。

成功も失敗も、毎日の体験が、具体的な教材になるのが小学校教育の現場なのです。

日常的で、身近な出来事こそ子どもたちにとって、わかり易く、理解しやすい教科書になるのです。

素朴ですなおな驚きや、感動で、ひとみ輝く子どもたちこそ、教師に充実感を与えてくれるのです。

## 三、文部（科学）省のおかしさ

文科省の最大のおかしさは、学習指導要領の「反省なき押しつけ」です。これまでも指導要領を、十年サイクルで改訂してきました。それまで、明らかになっ

た欠陥も認めず、反省もなしで「新しい」概念を、現場に押しつけ混乱させてきました。

最近では、一年足らずで、事前の協議も現場の意見も聞かず、「総合学習」や、「発展学習」などを一方的に増やすことを現場に強要しています。「できない子も個性…」「教えず、支援せよ…」などで現場を混乱させた責任に、正式な反省は示さずに…です。

「個人の良心は犯さない」と明言した「国旗・国家」法でも「調査と指導」を通じ良心を圧迫し、告発し、「犯罪者」まで生みだしています。超法規的「心のノート」（新しい修身）の押しつけも同様です。

つぎに、教育内容の無秩序さです。国語で漢字を増やし、三～四年で学習していた「かけ算九九」を、二年生で教えることなどを改善せずに、学習時間を減らし、総合学習などの教科を増やしました。

指導要領は、系統性に乏しく、毎時間のステップが高く、触れさえすれば、教えたことになってしまうほど時間が少ないのです。教室では振り返る時間も足りないので、家庭への宿題が増え、怒る先生が増えています。結果として、学力の低下は止められません。

細切れで詰め込む教育の被害者は、子どもであり、それを、時間内に教えさせられる教師です。

ついていけない子は、放置されるか塾に通います。保護者から、教師や学校に批判や不信感が生まれる仕組みは、文科省が作っているのです。

かつて、四年連続「学力テスト日本一」に輝いた香川県では、「日本一」と染め抜いた手ぬぐいや、饅頭が配られ、銅像まで記念に建てられました。

実態は、平均点の底上げのため「二ヶ月前から連日模擬テスト」「朝夕の補習」「できる子は友達に見せよ」「先生が教えていた」などの姿が、子どもにも目撃され、報告されています。

前任校で善い行いの子を取り上げた「善行賞」があったと聞き、安易に復活を提案したら、「賞を狙った行為が目に余った：」ので止めたと言うことでした。

全国的な「学力テスト」は、親や教師、子ども間に過酷な競争ばかりでなく、不正や犯罪を生むのです。

数字に表れない仕事は、評価されず、点数外の学習は、軽視されるので、教育者としての夢や希望、誇りまでが捻じ曲げられます。

## 四、新潟県教委や行政、職場のおかしさ

教職採用に不正は許されないのは当然です。

大学入試や教員採用や異動・管理職登用にまで、情

実にある筋の意向が入り込んでいる疑惑は、払拭されていません（教育の「不当な支配」になります）。

「自分の採用試験の点数や順位を知っている」「主事クラスの何人かに、ギフト券を持って訪問・就職活動した」等の話も聞きました。

県の方針で教職員の異動が激しいので、経験が役に立ちません。管理職の二～三年の異動は、着任早々次の転勤への実績作りとなり、落ち着いた学校はできません。

同年代の同僚には、管理職試験の勉強を勧め、私には試験の案内すら無いなど、職場内の不公平も大いに感じました。受験は「公開でないのか」と呆れました。学校運営（主任会・企画委員会等）から排除や、校務分掌を話し合って決める職場も減っています。

本来、教育活動が円滑にいくための改革こそ、教育委員会や行政の取り組まなければならない主要な仕事なのですが、「教員派閥」から派遣された役人が行うはずがない、できないというのが私の感想です。

「隣の学校にも転勤できない」「免許外教科があるのに、同一教科の教員が多い」「遠隔地に遠距離通勤や単身赴任が、次のポストの条件」などの制度などは、教育環境としての人間関係をも破壊しています。

## 五、教育改革の方向について

以前訪問した長野県諏訪市の校長は、「一年生を担任したら原則として、六年まで持ち上がってもらう」安易に教師を替えず、親も教師も子どもも一緒に泣いて苦労しても、本気の関係を創るのが学校だ…と述べていました。

中学校を中心に非行が吹き荒れた時、長岡付属小・中の講演会で「教員の異動を数年遅らせたら、特に、管理職の異動を今より一～二年延ばせたら、ほとんどの教育問題は解決する」と話がありました。つまり、自分の「次ぎ」ばかりを考えず、子どもたちとの「今」を大切にということだと思いました。

最近では、教育評論家の尾木直樹氏が「少人数学級が実現したら、教育問題の六～七割は解決する…」と述べています。

学級人数を減らすことや、仕事に専念できる異動方針の確立は急務だと思います。

根本からの改善に、教育関係者ばかりでなく、県民の英知を集めて取り組むべきではないでしょうか？

（かわい　やすひさ・長岡市）